

(19)日本国特許庁 (JP)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開2001-257602

(P2001-257602A)

(43)公開日 平成13年9月21日(2001.9.21)

(51)Int.Cl'	識別記号	F I	マークコード(参考)
H 03 M 13/35		H 03 M 13/35	5 B 0 0 1
G 06 F 11/10	3 3 0	G 06 F 11/10	3 3 0 S 5 J 0 6 5
H 03 M 13/13		H 03 M 13/13	5 K 0 1 4
13/23		13/23	5 K 0 2 2
13/29		13/29	

審査請求 未請求 請求項の数 6 OL (全 12 頁) 最終頁に続く

(21)出願番号 特願2000-67388(P2000-67388)

(71)出願人 000002369

セイコーエプソン株式会社

東京都新宿区西新宿2丁目4番1号

(22)出願日 平成12年3月10日(2000.3.10)

(72)発明者 小林 道夫

長野県飯田市大和3丁目3番5号 セイコーエプソン株式会社内

(74)代理人 100095728

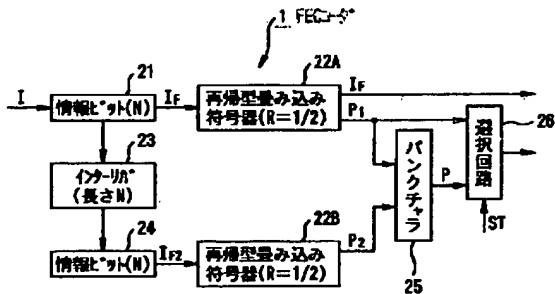
弁理士 上柳 雅善 (外1名)

(54)【発明の名称】 データ誤り訂正方法及び装置

(57)【要約】

【課題】 データを伝送する際に、伝送状態に応じて、ターボ符号化及び畳み込み符号化を選択する共に、1つ のターボ符号化手段を使用して、ターボ符号化及び畳符号化を選択的に行う。

【解決手段】 伝送状態が良好なときには送信側で、ターボ符号器を構成する第1の再帰型畳み込み符号器22Aを使用して送信データを畳み込み符号化して、これを受信側に送信し、受信側でターボ復号器を使用してビタビ復号を行い、伝送状態が不良なときには送信側で、ターボ符号器の第1の再帰型畳み込み符号器22A及び第2の畳み込み符号器22Bを使用して送信データをターボ符号化して、これを受信側に送信し、受信側でターボ復号器を使用してターボ復号を行う。



## 【特許請求の範囲】

【請求項1】 送信側で送信データを符号化して伝送することにより、受信側で伝送データのビット誤りを訂正するデータ誤り訂正方法において、前記送信側では前記受信側でのデータ受信状況に基づいて伝送状態を判断し、伝送状態が不良であるときに前記ターボ符号器で符号化された入力データの同期検出信号に基づいてデータ状態を判断し、データ状態が不良であるときに前記送信データをターボ符号化手段でターボ符号化して伝送し、伝送状態が良好であるときに前記送信データを前記ターボ符号化手段を利用して畳み込み符号化して伝送するようにしたことを特徴とするデータ誤り訂正方法。

【請求項2】 送信側で送信データを符号化して伝送することにより、受信側で伝送データのビット誤りを訂正するデータ誤り訂正方法において、前記送信側では、前記受信側でのデータ受信状況に基づいて伝送状態を判断し、伝送状態が不良であるときに前記ターボ符号器で符号化された入力データの同期検出信号に基づいてデータ状態を判断し、データ状態が不良であるときに前記送信データをターボ符号化手段でターボ符号化して伝送し、伝送状態が良好であるときに前記送信データを前記ターボ符号化手段を利用して畳み込み符号化して伝送し、受信側では、受信データに含まれる符号化方式設定情報に基づいて、当該符号化方式設定情報がターボ符号化であるときにターボ復号手段を使用して受信データをターボ復号し、畳み込み符号化であるときに前記ターボ復号手段を利用して受信データをビタビ復号するようにしたことを特徴とするデータ誤り訂正方法。

【請求項3】 送信側で送信データを符号化して伝送することにより、受信側で伝送データのビット誤りを訂正するデータ誤り訂正装置において、送信側では、前記受信側でのデータ受信状況に基づいて伝送状態を判断するデータ状態判定手段と、該データ状態判定手段で伝送状態が不良であると判定されたときに前記送信データをターボ符号化手段を使用してターボ符号化し、伝送状態が良好であると判定されたときに前記送信データを前記ターボ符号化手段を使用して畳み込み符号化する符号化手段と、該符号化手段で符号化された送信データを受信側に送信する送信手段とを備えていることを特徴とするデータ誤り訂正装置。

【請求項4】 送信側で送信データを符号化して伝送することにより、受信側で伝送データのビット誤りを訂正するデータ誤り訂正装置において、送信側では、前記受信側でのデータ受信状況に基づいて伝送状態を判断するデータ状態判定手段と、該データ状態判定手段で伝送状態が不良であると判定されたときに前記送信データをターボ符号化手段でターボ符号化し、伝送状態が良好であると判定されたときに前記送信データを前記ターボ符号化手段を使用して畳み込み符号化する符号化手段と、該符号化手段で符号化された送信データを符号化方式情報

を付加して受信側に送信する送信手段とを備え、受信側では、受信データに含まれる符号化方式情報を参照して符号化方式がターボ符号化であるか畳み込み符号化であるかを判定する符号化判定手段と、該符号化判定手段でターボ符号化であると判定されたときに受信データをターボ復号するターボ復号手段と、前記符号化判定手段で畳み込み符号化であると判定されたときに前記ターボ復号手段を利用してビタビ復号を行うビタビ復号手段とを備えていることを特徴とするデータ誤り訂正装置。

10 【請求項5】 前記符号化手段は、送信データの伴走ビットを格納する第1のシフトレジスタと、該第1のシフトレジスタの出力を畳み込み符号化する第1の再帰型畳み込み符号器と、前記第1のシフトレジスタの出力をインターリープするインターリープ回路と、該インターリープ回路の出力を格納する第2のシフトレジスタと、該第2のシフトレジスタの出力を畳み込み符号化する第2の再帰型畳み込み符号器と、前記第1及び第2の再帰型畳み込み符号器から出力されるパリティビットをバンクチュアリングするバンクチュアリング回路とを備え、データ状態判定手段の判定結果が伝送状態が不良であるときには前記第1の再帰型畳み込み符号器から出力される情報ビットと前記バンクチュアリング回路から出力されるパリティビットとでターボ符号を形成し、伝送状態が良好であるときには前記第1の再帰型畳み込み符号器から出力される情報ビットとパリティビットとで畳み込み符号を形成するようにしたことを特徴とする請求項4に記載のデータ誤り訂正装置。

20 【請求項6】 前記ターボ復号手段は、入力データを構成するデータ部と尤度情報とをもとにトレリス線図に基づいて第1の尤度情報を出力する第1の軟出力復号器と、該第1の軟出力復号器から出力される尤度情報が入力されるインターリーバと、該インターリーバでインターリープされた情報と前記入力データを構成するパリティデータ部とに基づいて第2の尤度情報を出力する第2の軟出力復号器と、該第2の軟出力復号器の第2の尤度情報が入力され、これをデインターリープして前記第1の軟出力復号器に入力するデインターリーバとを備えていることを特徴とする請求項4又は5に記載のデータエンコーダー訂正装置。

30 40 【発明の詳細な説明】

## 【0001】

【発明の属する技術分野】 本発明は、直交周波数分割多重(OFDM)変調方式を使用したデータ伝送方式等に好適なデータ誤り訂正方法及び装置に関する。

## 【0002】

【従来の技術】 近来、無線LAN等のデータ伝送方式に直交周波数分割多重変調方式を採用することが考えられている。

【0003】 この無線LANでは、一般に送信側で入力データに対して畳み込み符号器で拘束長K(=7)、符

号化率1/2～3/4の畳み込み符号に符号化された後インターリープされ、その後、変調方式に応じて、マッピングされ、マッピングされたデータがシリアルパラレル変換されて、64シンボル毎に逆高速フーリ変換され、この変換データにさらに12シンボルのガードインターバルが付加されてトータルで86個のOFDMシンボルのデータが生成され、この生成されたデータが波形整形フィルタを通過し、直交変調された後、キャリア周波数まで周波数を持ち上げて高周波増幅した後アンテナから送信される。

【0004】一方、受信側では、アンテナからの電波をローノイズアンプで増幅し、AGCアンプで受信レベルを検出し、AFC回路を用いてキャリアを除去した後復調し、ガードインターバルを除去し、その後64シンボル毎に高速フーリエ変換され、得られたシンボルをデマッピングし、デインタリープしてからビタビ復号を行うデコーダでデコードすることにより、受信データを得るようにしている。

【0005】そして、対選択性フェージング特性を改善するために、畳み込み符号化されたデータをビタビ復号する場合に代えてターボ符号化されたデータをターボ復号することが1999年電子情報通信学会通信ソサイエティ大会B-5-55「ターボ符号を使用したOFDM通信方式に関する検討」に記載されている。

#### 【0006】

【発明が解決しようとする課題】しかしながら、上記従来のOFDM通信方式にあっては、畳み込み符号で符号化した送信データをビタビ復号するのが一般的であり、これに代えてターボ符号で符号化した送信データを繰り返し回数を2回以上としたターボ復号することにより、ビット誤り率BER小さくすことができ、さらに繰り返し回数が多い程ビット誤り率が小さくなるものであるが、ビタビ復号に比較して演算量が多くなると共に、メモリ容量も多く必要とするので、伝送効率が低下するという未解決の課題がある。

【0007】このため、ターボ復号とビタビ復号とを併用することが考えられるが、上記従来例では、ビタビ復号には畳み込み符号器を使用して符号化し、ターボ復号には再帰型畳み込み符号器(RSC)を使用するので、送信側及び受信側の双方で2種類の符号器及び復号器を必要とし、回路構成が大型化し、小型化の要求に応えることができないという未解決の課題がある。

【0008】そこで、本発明は、上記従来例の未解決の課題に着目してなされたものであり、伝送データの状態に応じて畳み込み符号化とターボ符号化とを選択することが可能で、且つ回路構成を小型化することができるデータ誤り訂正方法及び装置を提供することを目的としている。

#### 【0009】

【課題を解決するための手段】上記目的を達成するため

に、請求項1に係るデータ誤り訂正方法は、送信側で送信データを符号化して伝送することにより、受信側で伝送データのビット誤りを訂正するデータ誤り訂正方法において、前記送信側では前記受信側でのデータ受信状況に基づいて伝送状態を判断し、伝送状態が不良であるときに前記ターボ符号器で符号化された入力データの同期検出信号に基づいてデータ状態を判断し、データ状態が不良であるときに前記送信データをターボ符号化手段でターボ符号化して伝送し、伝送状態が良好であるときに

10 前記送信データを前記ターボ符号化手段を利用して畳み込み符号化して伝送するようにしたことを特徴としている。

【0010】この請求項1に係る発明では、無線LAN等の双方向データ伝送を行う場合に、送信側から送信データを受信側に送信し、受信側でデータを受信したときに伝送状態を例えば送信データに含まれるフレーム同期シンボル等のトレーニング信号に基づいて判断し、伝送状態が不良であるときには、その旨を表す伝送状態不良情報を附加した送信データを受信側から送信側に返送することにより、伝送状態判定手段で、受信状態から伝送データの伝送状態を判定し、この判定結果が伝送状態が不良であるときにはターボ符号化手段でターボ符号化して伝送し、伝送状態が良好であるときにはターボ符号化手段を使用して畳み込み符号化して伝送し、伝送状態に応じてターボ符号化するか畳み込み符号化するかを選択し、共に共通のターボ符号化手段を使用して受信側に伝送する。

【0011】また、請求項2係るデータ誤り訂正装置は、送信側で送信データを符号化して伝送することにより、受信側で伝送データのビット誤りを訂正するデータ誤り訂正方法において、前記送信側では、前記受信側でのデータ受信状況に基づいて伝送状態を判断し、伝送状態が不良であるときに前記ターボ符号器で符号化された入力データの同期検出信号に基づいてデータ状態を判断し、データ状態が不良であるときに前記送信データをターボ符号化手段でターボ符号化して伝送し、伝送状態が良好であるときに前記送信データを前記ターボ符号化手段を利用して畳み込み符号化して伝送し、受信側では、受信データに含まれる符号化方式設定情報に基づいて、当該符号化方式設定情報がターボ符号化であるときにターボ復号手段を使用して受信データをターボ復号し、畳み込み符号化であるときに前記ターボ復号手段を利用して受信データをビタビ復号するようにしたことを特徴としている。

【0012】この請求項2に係る発明では、送信側で受信側でのデータ受信状況に基づいてターボ符号手段を使用してターボ符号化又は畳み込み符号化を行うと共に、何れの符号化を行ったかを表す符号化方式設定情報を含む送信データを受信側に送信する。一方、受信側では、送信側からの送信データに含まれる符号化方式設定情報

に基づいて受信したデータをターボ復号手段を使用したターボ復号か、同様にターボ復号手段を使用したビタビ復号を選択することにより、伝送状態が良好であるときには送信側で畳み込み符号化し、これを受信側でビタビ復号し、伝送状態が不良であるときには送信側でターボ符号化し、これを受信側でターボ復号する。

【0013】さらに、請求項3に係るデータ誤り訂正装置は、送信側で送信データを符号化して伝送することにより、受信側で伝送データのビット誤りを訂正するデータ誤り訂正装置において、送信側では、前記受信側でのデータ受信状況に基づいて伝送状態を判断するデータ状態判定手段と、該データ状態判定手段で伝送状態が不良であると判定されたときに前記送信データをターボ符号化手段を使用してターボ符号化し、伝送状態が良好であると判定されたときに前記送信データを前記ターボ符号化手段を使用して畳み込み符号化する符号化手段と、該符号化手段で符号化された送信データを受信側に送信する送信手段とを備えていることを特徴としている。

【0014】この請求項3に係る発明では、前述した請求項1に係る発明と同様の作用が得られる。

【0015】さらにまた、請求項4に係るデータ誤り訂正装置は、送信側で送信データを符号化して伝送することにより、受信側で伝送データのビット誤りを訂正するデータ誤り訂正装置において、送信側では、前記受信側でのデータ受信状況に基づいて伝送状態を判断するデータ状態判定手段と、該データ状態判定手段で伝送状態が不良であると判定されたときに前記送信データをターボ符号化手段でターボ符号化し、伝送状態が良好であると判定されたときに前記送信データを前記ターボ符号化手段を使用して畳み込み符号化する符号化手段と、該符号化手段で符号化された送信データを符号化方式情報を附加して受信側に送信する送信手段とを備え、受信側では、受信データに含まれる符号化方式情報を参照して符号化方式がターボ符号化であるか畳み込み符号化であるかを判定する符号化判定手段と、該符号化判定手段でターボ符号化であると判定されたときに受信データをターボ復号するターボ復号手段と、前記符号化判定手段で畳み込み符号化であると判定されたときに前記ターボ復号手段を利用してビタビ復号を行うビタビ復号手段とを備えていることを特徴としている。

【0016】この請求項4に係る発明では、前述した請求項2と同様の作用を得ることができる。

【0017】なおさらに、請求項5に係るデータ誤り訂正装置は、請求項4に係る発明において、前記符号化手段は、送信データの情報ビットを格納する第1のシフトレジスタと、該第1のシフトレジスタの出力を畳み込み符号化する第1の再帰型畳み込み符号器と、前記第1のシフトレジスタの出力をインターリープするインターリープ回路と、該インターリープ回路の出力を格納する第2のシフトレジスタと、該第2のシフトレジスタの出力を

畳み込み符号化する第2の再帰型畳み込み符号器と、前記第1及び第2の再帰型畳み込み符号器から出力されるパリティビットをバンクチュアリングするバンクチュアリング回路とを備え、データ状態判定手段の判定結果が伝送状態が不良であるときには前記第1の再帰型畳み込み符号器から出力される情報ビットと前記バンクチュアリング回路から出力されるパリティビットとでターボ符号を形成し、伝送状態が良好であるときには前記第1の再帰型畳み込み符号器から出力される情報ビットとパリティビットとで畳み込み符号を形成するようにしたことを特徴としている。

【0018】この請求項5に係る発明では、符号化手段で、ターボ符号化を行う場合には、第1の再帰型畳み込み符号器及び第2の再帰型畳み込み符号器を使用して、第1の再帰型畳み込み符号器から出力される情報ビットと第1及び第2の再帰型畳み込み符号器のパリティビットをバンクチュアリング回路でバンクチュアリングしてパリティビットとでターボ符号を形成するが、畳み込み符号化を行う場合には、第1の再帰型畳み込み符号器から出力される情報ビット及びパリティビットに基づいて畳み込み符号を形成する。

【0019】さらに、請求項6に係るデータ誤り訂正装置は、請求項4又は5に係る発明において、前記ターボ復号手段は、入力データを構成するデータ部と尤度情報をもとにトレリス線図に基づいて第1の尤度情報を出力する第1の軟出力復号器と、該第1の軟出力復号器から出力される尤度情報が入力されるインターリーバと、該インターリーバでインターリープされた情報と前記入力データを構成するパリティデータ部とに基づいて第2の尤度情報を出力する第2の軟出力復号器と、該第2の軟出力復号器の第2の尤度情報が入力され、これをインターリープして前記第1の軟出力復号器に入力するインターリーバとを備えていることを特徴としている。

【0020】この請求項6に係る発明では、入力データに含まれるデータ部をトレリス線図に基づいて第1の尤度情報を出力する第1の軟出力復号器に入力するようしているので、この第1の軟出力復号器でターボ復号を行なう際の尤度情報を算出する場合に、例えばMAPアルゴリズムを適用したときには、全てのデータに対して確率関数 $\alpha_k(s)$ をビタビ復号のメトリックに対応する関数 $\gamma_k(i,j)$ に基づいて最初のデータから最後のデータまで演算して求め、さらに別の確率関数 $\beta_k(s)$ を同様に関数 $\gamma_k(i,j)$ に基づいて最後のデータから最初のデータまで逆に演算して求め、これら確率関数 $\alpha_k(s)$ 及び $\beta_k(s)$ を全てメモリに蓄積し、これら確率関数 $\alpha_k(s)$ 及び $\beta_k(s)$ に基づいて尤度情報を演算する。このため、関数 $\gamma_k(i,j)$ がビタビ復号のメトリックに対応していることから、この関数 $\gamma_k(i,j)$ を使用して所定の演算を行うことにより、ビタビ復号が可能となる。

【発明の実施の形態】以下、本発明の実施の形態を図面を伴って説明する。

【0022】図1は本発明を無線ローカルエリアネットワーク（以下、単に無線LANと称す）に適用した場合の一例を示す概略構成図である。

【0023】図中、1はパーソナルコンピュータ、VTR、ビデオカメラ、プリンタ等のデジタル機器1であって、このデジタル機器1で他のデジタル機器との間でデータ伝送を行う場合に、無線LANを構築する無線端末2を介してデータ伝送を行う。

【0024】この無線端末2は、デジタル機器1との間のデータの授受を行うインタフェース3と、このインターフェース3に接続された送信回路4及び受信回路5と、これら送信回路4及び受信回路5を選択してアンテナ6に接続する切換回路7と、インターフェース3、送信回路4、受信回路5及び切換回路7を制御するコントローラ8とを備えている。

【0025】送信回路4は、インターフェース3から入力される送信データを受信回路5で検出される伝送状態に応じて畳み込み符号化処理及びターボ符号化処理の何れかを選択して符号化するフォワード・エラー・コレクション(Forward Error Correction)（以下、単にFECと称す）コーダ11と、このFECコーダ11で符号化されたデータをOFDM(Orthogonal Frequency Division Multiplexing)変調するOFDM変調回路12とで構成されている。

【0026】そして、送信回路4のFECコーダ11は、図2に示すように、全体としてターボ符号器の構成を有し、送信情報IがN段のシフトレジスタ21に供給されて、Nビットづつに区切られて格納され、このシフトレジスタ21から順次出力される情報ビット $I_{F1}$ は第1の再帰型組織畳み込み符号器(RSC)22Aに直接入力されると共に、インターリーバ23でインターリープされた後シフトレジスタ24に格納され、このシフトレジスタ24から出力される情報ビット $I_{F2}$ が第2の再帰型組織畳み込み符号器(RSC)22Bに入力され、第1及び第2の再帰型組織畳み込み符号器22A及び22Bから出力されるパリティビット $P_1$ 及び $P_2$ がパンクチャラ25でパンクチャリングされ、このパンクチャリングされたパリティビットPと第1の再帰型組織畳み込み符号器22Aから出力されるパリティビット $P_1$ とが選択回路26に供給され、この選択回路26で選択されたパリティビット $P_1$ 又はPが情報ビット $I_{F1}$ に付加されて出力される構成を有する。

【0027】ここで、選択回路26は後述するコントローラ8からの選択信号STが論理値“0”であるときには、第1の再帰型組織畳み込み符号器22Aから出力されるパリティビット $P_1$ を選択し、これを情報ビット $I_F$ に付加して畳み込み符号を形成し、選択信号STが論理値“1”であるときには、パンクチャラ25から出力

10

20

【0029】また、パンクチャラ25は、例えば下記に示すパンクチャリングパターンによって第1及び第2の再帰型組織畳み込み符号器22A及び22Bから出力されるパリティビット $P_1$ 及び $P_2$ をパンクチャリングする。

【0030】

【数1】

$$\begin{bmatrix} 0 & 1 \\ 1 & 0 \end{bmatrix}$$

【0031】したがって、パンクチャラ25から出力されるパリティビットPは、各時点でのパリティビット $P_1$ 及び $P_2$ を $p_1(0), p_1(1), p_1(2), p_1(3), \dots$ 及び $p_2(0), p_2(1), p_2(2), p_2(3), \dots$ としたときに、 $p_2(0), p_1(1), p_2(2), p_1(3), \dots$ となる。

【0032】また、OFDM変調回路12では、図4に示すように、入力される符号化されたデータをマッピング回路31で変調方式に応じてマッピング処理され、その処理データがシリアルパラレル変換されて逆高速フーリエ変換(IFFFT)回路32に供給されて、64シンボル毎に逆高速フーリエ変換される。この変換データが符号化方式情報付加回路33に供給されて、FECコーダ11でターボ符号及び畳み込み符号の何れの符号化を行ったかを表す1ビットの符号化方式情報を例えば同期シンボルの最後に付加し、次いでガードインターバル付加回路34に供給されてさらに12シンボルのガードインターバルが付加されてトータルで86個のOFDM(Orthogonal Frequency Division Multiplexing)シンボルのデータが生成される。生成されたデータは波形整形フィルタ35で波形整形された後、直交周波数多重変調回路36で直交周波数多重変調(BPSK-OFDM)され、次いで乗算器37でキャリア周波数まで周波数を持ち上げてから高周波アンプ38で高周波増幅されて切換

50

回路7に出力される。

【0033】一方、受信回路5は、アンテナ6で受信した電波が切換回路7を介して入力され、これをOFDM復調するOFDM復調回路41と、このOFDM復調回路41で復調されたデータをターボ復号及びビタビ復号の何れかの復号を行うFECデコーダ42とで構成されている。

【0034】OFDM復調回路41では、図5に示すように、アンテナ6で受信した電波を切換回路7を介してローノイズアンプ43で増幅し、乗算器44で搬送波を乗算してからAGCアンプ45で受信レベルを検出し、復調回路46でAFC回路47を用いてキャリアを除去した後復調し、ガードインタバル除去回路48でベースバンド信号に適当な窓をかけてガードインタバルが除去される。次いで、符号化方式情報検出回路49で符号化方式情報を検出してからこれを除去した後、高速フーリエ変換(FFT)回路50で64シンボル毎に高速フーリエ変換した後、得られたシンボルをデマッピング回路51でデマッピングすると共に、デインターリープし、さらにパラレルシリアル変換してからFECデコーダ42に供給する。

【0035】また、FECデコーダ42は、図6に示すようにターボ復号器で構成されている。すなわち、ターボ復号器は、高速フーリエ変換された変換データを送信ビット $I_F$ が通信チャネルで影響を受けた情報データ $L_c y$ とバリティビットPが通信チャネルで影響を受けたバリティデータ $L_c y'$ とに分離し、バリティデータ $L_c y'$ については送信回路4のパンクチャラ25でパンクチュアリングされたバリティビットPの該当ビット位置に任意のダミービット(通常は-1として扱う)を挿入して出力するデータ分離回路60と、このデータ分離回路60から出力される情報データ $L_c y$ が一方の入力側に、他方の入力側に尤度情報 $L^{(1)}(u)$ の初期値( $=0$ )又は後述する尤度情報 $L^{(1)}(u)$ が入力される第1の軟出力復号器61と、この軟出力復号器61から出力される第1回目の尤度情報 $L_E^{(1)}(u)$ をインターリープするインターリバ62と、このインターリバ62の出力 $L^{(2)}(u)$ と前記データ分離回路60から出力されるバリティデータ $L_c y'$ とが入力される軟出力復

\*号器63と、この軟出力復号器63から出力される尤度情報 $L_E^{(2)}(u)$ をインターリープして尤度情報 $L^{(1)}(u)$ として第1の軟出力復号器61に供給するインターリバ64とで構成されている。ここで、第1の軟出力復号器61は、第1回目の復号出力 $L^{(1)}(u)$ を出力することができ、第2の軟出力復号器63は第2回目の復号出力 $L^{(2)}(u)$ 出力することができる。

【0036】このように、ターボ復号器は、第1の軟出力復号器61で第1回目の尤度情報 $L_E^{(1)}(u)$ の復号を行い、これをインターリバ62でインターリープした情報とバリティビット情報 $L_c y'$ に基づいて第2の軟出力復号器63で第2回目の尤度情報 $L_E^{(1)}(u)$ の復号を行い、これをインターリバ64でインターリープした尤度情報 $L^{(1)}(u)$ とデータ $L_c y$ に基づいて第1の軟出力復号器61で第3回目の尤度情報 $L_E^{(3)}(u)$ の復号を行い、これを*i*回目(例ええば*i*=5)まで繰り返してターボ復号を行い、最終的に第*i*回目で復号を終了したときの復号データは $L^{(1)}(u)$ となる。

【0037】ここで、ターボ復号に用いられる繰り返し軟判定復号のアルゴリズムとしては、MAP (Maximum a posteriori Probability) アルゴリズム、Log-MAPアルゴリズム、SOVA (Soft Output Viterbi) アルゴリズム等を適用することができ、これらの場合、受信データをNビットごとにメモリに蓄えて、5回~20回程度、繰り返し軟判定復号を行う必要があり、復号に時間がかかる。

【0038】そして、図6のターボ復号器において、軟出力復号器61のトレリス線図は、図7に示すように表される。

【0039】すなわち、軟出力復号器61で尤度情報 $L_E^{(1)}(u)$ を演算する場合、MAPアルゴリズムであれば、図7のトレリス線図に従って全てのデータに対して、入力データ $L_c y$ のk番目のデータを $Y_k = (y_k^I, y_k^P)$ とした場合、下記(1)式で表される条件付き確率 $P(Y_k | u_k)$ を演算し、これをメモリに蓄積する。

#### 【0040】

##### 【数2】

$$P(Y_k | u_k) = \exp \left[ -\frac{(y_k^I - u_k^I)^2}{2\sigma^2} \right] \cdot \exp \left[ -\frac{(y_k^P - u_k^P)^2}{2\sigma^2} \right] \dots \quad (2)$$

【0041】ここで、 $u_k$ はk番目の情報ビット*i*の推定値、 $y_k^P$ はk番目のバリティビットの推定値である。

【0042】そこで、図7のトレリス線図に従ってターボ復号する場合には、図8で各枝の確率関数 $\gamma_{ik}(i, j)$ が下記(3)式で表される。

##### 【0043】

##### 【数3】

$$= \exp \left[ -\frac{(y_k^I - i)^2}{2\sigma^2} \right] \cdot \exp \left[ -\frac{(y_k^P - j)^2}{2\sigma^2} \right] \dots \quad (3)$$

11

【0044】この図8で、確率関数  $\alpha_k(s)$  ( $s = 0, 1, 2, 3$ ) のひとつである例えば  $\alpha_k(0)$  は下記

$$\alpha_k(0) = \alpha_{k-1}(0) \cdot r_k(0,0) + \alpha_{k-1}(1) \cdot r_k(1,1) \quad \dots (4)$$

ターボ復号の場合、各データ  $Y_k$  每に、確率関数  $\alpha_k(s)$  の値を最初のデータから最後の  $N$  個目のデータまで求め、更に別の確率関数  $\beta_k(s)$  という値を今度は最後の  $N$  個目のデータから最初のデータまで逆に計算していく必要がある。ターボ復号に時間がかかる理由の一つはここに原因がある。しかも、演算された全ての確率関数  $\alpha_k(s)$  及び  $\beta_k(s)$  をメモリに蓄えておく必要がある※10

$$M_k(s) = M_{k-1}(s') + \max[r_k(i, j), r_k(i', j')] \quad \dots (5)$$

すなわち、生き残りバスと共にそのバスに相当する出力の推定結果をメモリに蓄えておき、バスが消失した時点でトレスバックを行うことによりビタビ復号が可能となる。その場合の出力の推定結果を格納する場所としては、ターボ復号時に確率関数  $\beta_k(s)$  を格納するメモリを使用することが可能である。

【0048】したがって、ターボ復号器に上記(5)式における右辺第2項の  $r_k(i, j)$  と  $r_k(i', j')$  を比較して何れか大きい方を選択するための比較器など少しの回路を付加するのみでビタビ復号を行うことが可能であり、このビタビ復号では、復号が逐次的に行われる所以、復号時間も短くて済むことになる。

【0049】そして、ターボ復号器でターボ復号を行うかビタビ復号を行うかは、受信信号の状態が良いときにはビタビ復号を選択し、受信信号の状態が悪いときにはターボ復号を行ってビット誤り率(BER)を向上させる。

【0050】また、コントローラ8は、インターフェース3にディジタル機器1から送信データが入力されると切換回路7を送信回路4側に切換えて、高周波アンプ38の出力を切換回路7を介してアンテナ6に伝達して送信し、ディジタル機器1からの送信データがないときには切換回路7を受信回路5側に切換えて、アンテナ6で受信した電波を切換回路7を介してローノイズアンプ43に供給すると共に、このときにAGCアンプ45で検出される受信レベル検出信号RDが入力され、この受信レベル検出信号RDが設定閾値以下であるときには伝送状態が不良であると判断して送信回路4のFECコーデ11でターボ符号化を選択しする例えば論理値“1”的選択信号STを出力し、受信レベル検出信号RDが設定閾値を超えていたときには伝送状態が良好であると判断してFECコーデ11で置き込み符号化を選択する例えば論理値“0”的選択信号STを出力し、さらに、OFDM復調回路41の符号化方式情報検出回路49で検出した符号化方式情報が入力され、これが論理値“1”であるときにはFECデコーデ42でターボ復号を選択する論理値“1”的選択信号SRを出力し、論理値“0”であるFECデコーデ42でビタビ復号を行う論理値

★50

12

\* (4)式で表すことができる。

\* 【0045】

$$\alpha_k(0) = \alpha_{k-1}(0) \cdot r_k(0,0) + \alpha_{k-1}(1) \cdot r_k(1,1) \quad \dots (4)$$

※ため、その分のメモリ容量も必要となる。

【0046】ところで、ターボ復号における確率関数  $\alpha_k(i, j)$  は、ビタビ復号におけるメトリックに相当する量であるので、バスマトリック  $M_k(s)$  を下記(5)のように定めれば図9において生き残りバスを求めることができ、ビタビ復号を行うことができる。

【0047】

..... (5)

★ “0”的選択信号SRを出力する。

【0051】ここで、伝送状態を検出するには、受信アンテナ11として例えば4素子～8素子程度のリニアアーレーアンテナや平面アーレーアンテナ等で構成されるアダプティブアーレーアンテナを適用したダイバーシティ受信方式において、受信信号の先頭に付加された同期シンボル、パイロットシンボル等のトレーニング信号を用いて、AGC回路のゲイン及びアレーの選択を行う際の検出信号のレベルに基づいてこの検出信号のレベルが設定閾値を越えているときには伝送状態が良好であると判断し、設定閾値以下であるときには伝送状態が不良であると判断する。

【0052】次に、上記実施形態の動作を説明する。

【0053】今、例えば2台のディジタル機器1が配設され、これらに接続された無線端末2によって無線LANが構築されているものとする。この状態で、一方のディジタル機器1が他方のディジタル機器1に対して送信する送信データがある場合には、この送信データをインターフェース3に出力することにより、コントローラ8で送信要求であると判断して、切換回路7を送信回路4側に切換えると共に、前回の受信回路5でのAGCアンプ45で検出された受信レベル検出信号RDが設定閾値を越えていて、伝送状態が良好であるものとすると、論理値“0”的選択信号STをFECコーデ11に出力すると共に、符号化方式情報付加回路33に論理値“0”的符号化方式情報を出力する。

【0054】このため、FECコーデ11では、選択信号STが論理値“0”であるので、選択回路26で第1の再帰型置き込み符号器22Aから出力されるパリティビット  $P_1$  が選択されることにより、このパリティビット  $P_1$  が情報ビット  $I_F$  に付加されることにより、置き込み符号が生成され、これがOFDM変調回路12に供給される。

【0055】このOFDM変調回路12では、符号化されたデータをマッピング回路31で変調方式に応じてマッピング処理し、その処理データがシリアルパラレル変換されて逆高速フーリエ変換回路32に供給されて、64シンボル毎に逆高速フーリエ変換され、この変換データ

13

タが符号化方式情報付加回路33に供給されて、FECコード11で畳み込み符号を行ったことを表す論理値

“0”の符号化方式情報を例えれば伝送フレームの先頭に設けられた同期シンボルの最後又はバイロットシンボルの最後に付加し、次いでガードインタバル付加回路34に供給されてさらに12シンボルのガードインタバルが付加されてトータルで86個のOFDM(Orthogonal Frequency Division Multiplexing)シンボルのデータが生成される。生成されたデータは波形整形フィルタ35で波形整形された後、直交周波数多重変調回路36で直交周波数多重変調(BPSK-OFDM)され、次いで乗算器37でキャリア周波数まで周波数を持ち上げてから高周波アンプ38で高周波増幅されて切換回路7に出力され、アンテナ6から他のデジタル機器1に送信される。

【0056】他のデジタル機器1では、送信データをアンテナ6で受信すると、これが切換回路7を介して受信回路5に供給され、受信信号をローノイズアンプ43で増幅し、乗算器44で搬送波を乗算してからAGCアンプ45で受信レベルを検出し、復調回路46でAFC回路47を用いてキャリアを除去した後復調し、ガードインタバル除去回路48でガードインタバルが除去される。次いで、符号化方式情報検出回路49で符号化方式情報を検出してからこれを除去した後、高速フーリエ変換(FFT)回路50で64シンボル毎に高速フーリエ変換した後、得られたシンボルをデマッピング回路51でデマッピングすると共に、デインターリーブし、さらにパラレルシリアル変換してからFECデコーダ42に供給する。このとき、符号化方式情報検出回路49で論理値“0”的符号化方式情報を検出するので、コントローラ8からFECデコーダ42に論理値“0”的選択信号SRが出力され、このため、FECデコーダ42で前述したビタビ復号が行われる。このように、伝送状態が良好な場合には、送信側でターボ符号器を使用してターボ符号に代えて畳み込み符号化処理が行われることにより、高速データ送信が可能となると共に、受信側でターボ復号器を使用してターボ復号に代えてビタビ復号を行うので、演算処理を簡略化して復号時間を短縮しながら十分な誤り訂正ができる。

【0057】一方、受信回路5のAGCアンプで検出した受信レベル検出信号RDのレベルが設定閾値以下であるときには、伝送状態が不良であると判断され、コントローラ8から論理値“1”的選択信号STが送信回路4のFECコード11に出力されることにより、選択回路26で第1の再帰型畳み込み符号器22Aから出力されるパリティビットP<sub>1</sub>及び第2の再帰型畳み込み符号器22Bから出力されるパリティビットP<sub>2</sub>とをパンクチャラ25でパンクチャリングしたパリティビットPが選択され、これが情報ビットI<sub>F</sub>に付加されてターボ符号が生成され、これがOFDM変調回路12で論理値

14

“1”的符号化方式情報が付加されると共に、OFDM変調されて切換回路7を介してアンテナ6から送信される。

【0058】このターボ符号化された送信データを受信側の送信端末2で受信すると、これが切換器7を介して受信回路5に供給され、先ずOFDM復調回路41で復調されると共に、符号化方式情報検出回路49で符号化方式情報を検出し、これをコントローラ8に出力することにより、このコントローラ8から論理値“1”的選択信号SRが受信回路5のFECデコーダ42に出力されることにより、このFECデコーダ42で前述したターボ復号を行、復号したデータをインタフェース3を介してディジタル機器1に出力する。

【0059】このように、本実施形態では、伝送状態が良好なときには、送信側で送信データを畳み込み符号化してからOFDM変調を行って受信側に送信し、受信側では送信データを受信すると、これをOFDM復調を行ってからビタビ復号を行うことにより、速い伝送速度で送信データの送信を行い、伝送状態が不良であるときは、送信側で送信データをターボ符号化してからOFDM変調を行って受信側に送信し、受信側では送信データを受信すると、これをOFDM復調を行ってからターボ復号を行うことにより、高信頼性を確保することができ、しかも、送信側ではターボ符号化及び畳み込み符号化の双方を共通のターボ符号器を使用して行い、受信側ではターボ復号及びビタビ復号を共通のターボ復号器を使用して行うことにより、送信側及び受信側の双方で、回路構成を簡略化することができる。

【0060】従来例のように、通信チャンネルの状態が良い場合には、送信側で畳み込み符号を使用し、チャンネル状態が悪い場合には送信側でターボ符号を使用するので、送信側でターボ符号器の他に畳み込み符号器が必要となると共に、受信側でターボ復号器の他にビタビ復号器が必要となり、回路規模が増大し、効率の良いデータ伝送を行うことができない。

【0061】なお、上記実施形態においては、FECコード11でパリティビットP<sub>1</sub>及びP<sub>2</sub>についてパンクチャラ25でパンクチャリングしてパリティビットPを生成する場合について説明したが、これに限定されるものではなく、パンクチャラ25を省略してパリティビットP<sub>1</sub>及びP<sub>2</sub>を交互に整列させて情報ビットI<sub>F</sub>と共に送信するようにしてもよく、この場合には受信側のFECデコーダ20におけるデータ分離回路30でパリティデータに対するダミービットの挿入を省略する。

【0062】また、上記実施形態においては、FECコード11を畳み込み符号器として使用する場合に、第1の再帰型畳み込み符号器22AのパリティビットP<sub>1</sub>をそのまま情報ビットI<sub>F</sub>に付加する場合について説明したが、必要に応じてパンクチャラを介して、パンクチャリングしたパリティビットを情報ビットI<sub>F</sub>に付加す

るようにもよい。

【0063】さらに、上記実施形態においては、ターボ符号を生成する再帰型組織畳み込み符号器22A及び22Bを構成するシフトレジスタを2段で構成し生成行列がh1=7, h2=5に設定した場合について説明したが、これに限定されるものではなく、シフトレジスタの段数を任意に設定して任意の生成行列を設定することができる。

【0064】さらにまた、上記実施形態においては、送信データを送信する際に、FECコード11で選択した畳み込み符号であるかターボ符号であるかを表す符号化方式情報を附加して送信する場合について説明したが、これに限定されるものではなく、符号化方式情報の付加を省略して、これに代えて、無線LANに管理用のデータ処理装置を組み込み、この管理用のデータ処理装置で伝送状態を常時検出し、このデータ処理装置からボーリングによって管理下にある各無線端末2に符号化方式を及び復号化方式を指定する情報を伝送するようにしてもよい。

【0065】なおさらに、上記実施形態においては、受信回路5における受信レベル検出信号に基づいて伝送状態を判断する場合について説明したが、これに限定されるものではなく、當時は送信側で畳み込み符号化して送信し、これを受信側でビタビ復号を行うようにし、受信側からの送信データ再送要求があったとき又は複数回の送信データ再送要求があったときに伝送状態が不良であると判断して送信データをターボ符号化して送信し、受信側でターボ復号を行うようにしてもよい。

【0066】また、上記実施形態においては、無線LANに本発明を適用した場合について説明したが、有線LANや他のデータ伝送装置に本発明を適用することができる。

【0067】さらに、上記実施形態においては、送信回路4でOFDM変調回路12を適用し、受信回路でOFDM復調回路を適用する場合について説明したが、これに限定されるものではなく、CDMA変復調方式や他の変復調方式を適用することができる。

#### 【0068】

【発明の効果】以上説明したように、請求項1及び請求項3に係るデータ誤り訂正方法及びデータ誤り訂正装置によれば、無線LAN等の双方方向データ伝送を行う場合に、送信側から送信データを受信側に送信し、受信側でデータを受信したときに伝送状態を例えば送信データに含まれるフレーム同期シンボル等のトレーニング信号に基づいて判断し、伝送状態が不良であるときには、その旨を表す伝送状態不良情報を付加した送信データを受信側から送信側に返送することにより、伝送状態判定手段で、受信状態から伝送データの伝送状態を判定し、この判定結果が伝送状態が不良であるときにはターボ符号化手段でターボ符号化して伝送するようにしたので、別途

畳み込み符号化手段を設けることなく、送信側の回路構成をターボ符号化手段を設けるだけでよく、回路構成を簡略化しながら伝送状態に応じた最適な符号化方式を選択することができるという効果が得られる。

【0069】また、請求項2及び請求項4に係るデータ誤り訂正方法及びデータ誤り訂正装置によれば、送信側で受信側でのデータ受信状況に基づいてターボ符号手段を使用してターボ符号化又は畳み込み符号化を行うと共に、何れの符号化を行ったかを表す符号化方式設定情報を含む送信データを受信側に送信し、受信側では、送信側からの送信データに含まれる符号化方式設定情報に基づいて受信したデータをターボ復号手段を使用したターボ復号を行うか、同様にターボ復号手段を使用したビタビ復号を行うかを選択するようにしたので、受信側でも別途ビタビ復号手段を設けることなく、ターボ復号手段を設けるだけで済み、回路構成を簡略化することができると共に、送信データの符号化方式に対応する復号を確実に行うことができるという効果が得られる。

【0070】さらに、請求項5に係るデータ誤り訂正装置によれば、符号化手段で、ターボ符号化を行う場合には、第1の再帰型畳み込み符号器及び第2の再帰型畳み込み符号器を使用して、第1の再帰型畳み込み符号器から出力される情報ビットと第1及び第2の再帰型畳み込み符号器のパリティビットをパンクチュアリング回路でパンクチュアリングしてパリティビットとでターボ符号を形成するが、畳み込み符号化を行う場合には、第1の再帰型畳み込み符号器から出力される情報ビット及びパリティビットに基づいて畳み込み符号を形成するので、1つのターボ符号化手段で畳み込み符号化とターボ符号化との双方を選択的に行うことができるという効果が得られる。

【0071】さらにまた、請求項6に係るデータ誤り訂正装置によれば、入力データに含まれるデータ部をトレリス線図に基づいて第1の尤度情報を出力する第1の軟出力復号器に入力するようしているので、この第1の軟出力復号器でターボ復号を行う際の尤度情報を算出する場合に、例えばMAPアルゴリズムを適用したときには、全てのデータに対して確率関数 $\alpha_k(s)$ をビタビ復号のメトリックに対応する関数 $\tau_k(i,j)$ に基づいて最初のデータから最後のデータまで演算して求め、さらに別の確率関数 $\beta_k(s)$ を同様に関数 $\tau_k(i,j)$ に基づいて最後のデータから最初のデータまで逆に演算して求め、これら確率関数 $\alpha_k(s)$ 及び $\beta_k(s)$ を全てメモリに蓄積し、これら確率関数 $\alpha_k(s)$ 及び $\beta_k(s)$ に基づいて尤度情報を演算する。このため、関数 $\tau_k(i,j)$ がビタビ復号のメトリックに対応していることから、この関数 $\tau_k(i,j)$ を使用して所定の演算を行うことにより、ビタビ復号が可能となるという効果が得られる。

#### 【図面の簡単な説明】

【図1】本発明を無線LANに適用した場合の一実施形態を示すブロック図である。

17

【図2】FECコーダの具体的構成を示すブロック図である。

【図3】再帰型組織畳み込み符号器の具体例を示すブロック図である。

【図4】OFDM変調回路の具体例を示すブロック図である。

【図5】OFDM復調回路の具体例を示すブロック図である。

【図6】FECデコーダの具体的構成を示すブロック図である。

【図7】軟出力復号器のトレリス線図を示す説明図である。

【図8】トレリス線図を使用してターボ復号を行う場合の説明図である。

【図9】トレリス線図を使用してビタビ復号を行う場合の説明図である。

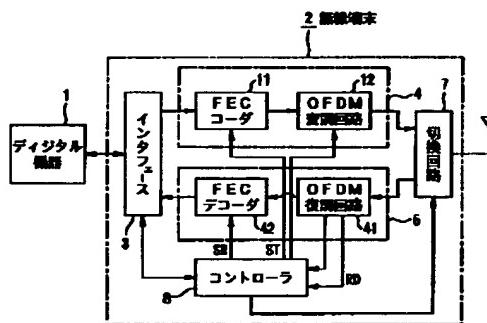
#### 【符号の説明】

- 1 ディジタル機器
- 2 無線端末
- 3 インタフェース
- 4 送信回路
- 5 受信回路
- 6 アンテナ
- 7 切換回路

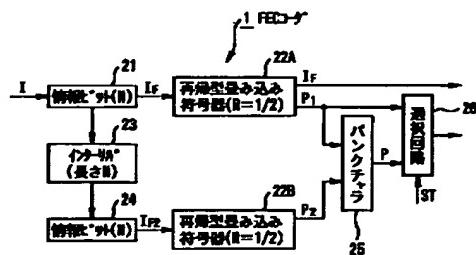
18  
8 コントローラ  
11 FECコーダ

- 12 OFDM変調回路
- 13 マッピング回路
- 21 シフトレジスタ
- 22A 第1の再帰型畳み込み符号器
- 22B 第2の再帰型畳み込み符号器
- 23 インターリーバ
- 24 シフトレジスタ
- 10 25 パンクチャラ
- 26 選択回路
- 27 加算器
- 28 シフトレジスタ
- 29 加算器
- 33 符号化方式情報付加回路
- 41 OFDM復調回路
- 42 FECデコーダ
- 49 符号化方式情報検出回路
- 60 データ分離回路
- 20 61 軟出力復号器
- 62 インターリーバ
- 63 軟出力復号器
- 64 デインターリーバ

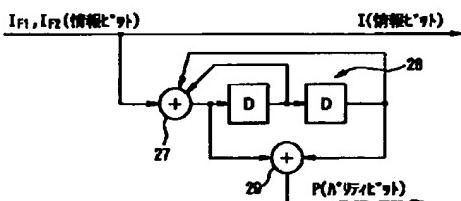
【図1】



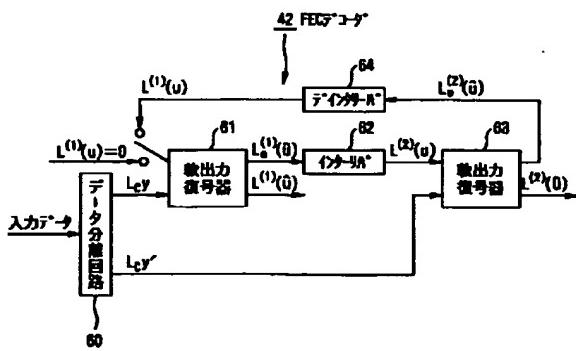
【図2】



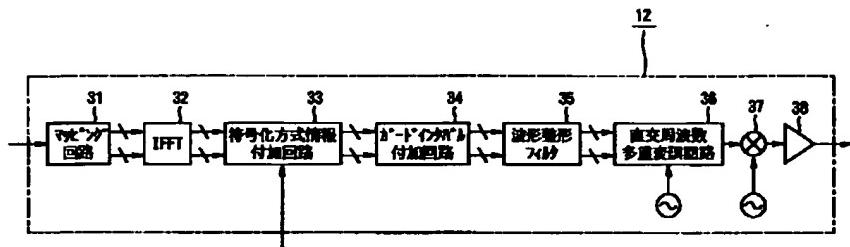
【図3】



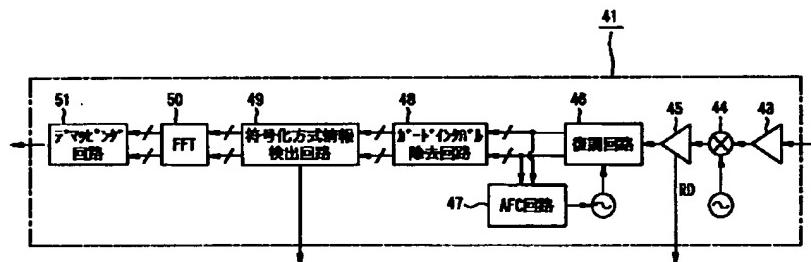
【図6】



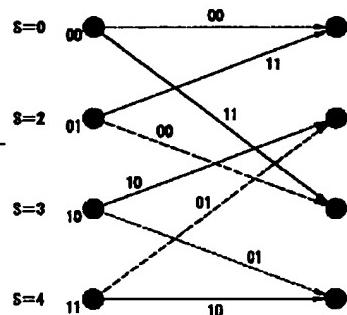
【図4】



【図5】

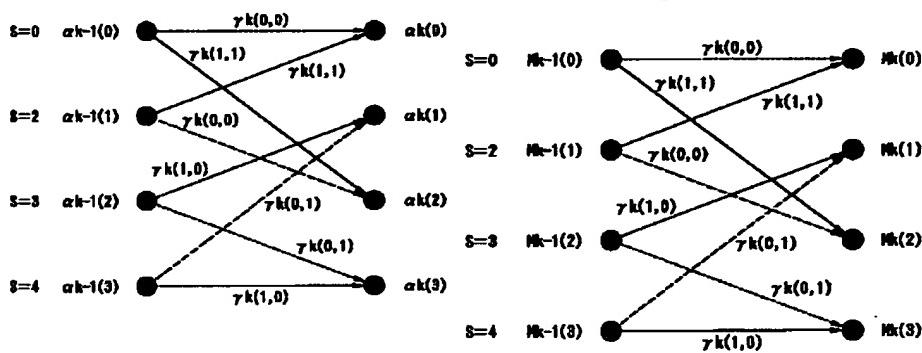


【図7】



【図8】

【図9】



フロントページの続き

(51) Int. Cl. 7

H 04 J 11/00  
H 04 L 1/00

識別記号

F I

H 04 J 11/00  
H 04 L 1/00

テーマコード (参考)

Z  
B

F ターム(参考) 5B001 AA10 AA13 AB02 AB03 AB05  
AC01 AD06  
5J065 AA01 AB01 AC02 AD01 AD10  
AE06 AF03 AG06 AH05 AH15  
5K014 AA01 BA10 BA11 EA01 EA07  
FA11 GA01 GA02 HA10  
5K022 DD01 DD13 DD22 DD32